

東京国際芸術祭 2006 提携公演

にしすがも創造舎演劇上演プロジェクト Vol.2

『4.48 サイコシス』

作: サラ・ケイン

演出: 阿部初美 ドラマトゥルク: 長島確



©佐藤慎也.


主 催: NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

特別協賛: **Asahi** アサヒビール株式会社

協 賛: **SHI/EIDO** / **トヨタ自動車株式会社** / **Panasonic**

助 成: **Asahi** アサヒビール芸術文化財団

後 援: 豊島区 豊島区文化創造都市宣言記念事業

 平成 17 年度文化庁芸術創造活動重点支援事業

2005 年 3 月 18 日(土) - 21 日(火・祝)

にしすがも創造舎特設劇場

お 問 合 せ

NPO 法人アートネットワーク・ジャパン(TIF)

〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨 4 - 9 - 1 旧朝日中学校

TEL.03-5961-5202/ FAX.03-5961-5207/ tif@anj.or.jp

2002 年、本作品のリーディング公演を演出した阿部初美と、日本でドラマトルクとしての役割を担える稀有な人材である、長島確。その二人が1年以上の時間をかけてコンセプトを練り上げ、10 代～60 代の俳優・スタッフとともに実験的な共同作業に取り組む。サラ・ケインの戯曲が持つ広がりや深みから、あらゆる可能性を見出しながら、現代日本社会の"痛み"を「立ち止まって考える」"場" としての上演、「4.48 サイコシス」。

顔のない"痛み"

暴力的なデビューからわずか4年後の1999年、自殺によって28才でキャリアの幕を閉じたイギリスの劇作家サラ・ケイン。彼女の遺作「4.48 サイコシス」は、触れる者の肌をしずかに切り開き、深く突き刺さる。その詩的なことばは鬱病で自殺願望をもつ わたし の物語として作家自身と重ね合わせられてきたが、テキストには人物の指定もト書きもなく、むしろさまざまな人々の生の交錯する、同時多発的な"場"へと裂けている。誰もがもつ「この自分という冷たく黒い池」。そして"他者"と通じ合うこと。魂の舞台ともいべきその場所から、現在の日本社会の抱える"痛み"が姿をあらわすだろう...

作家、サラ・ケインと作品、「4.48 サイコシス」

攻撃性とクールさを兼ね備えた 90 年代ブリティッシュ・ポップ・ウェーブの劇作家の一人であるサラ・ケインの作品は、希望を見出すことのできない世界情勢や、西側資本主義社会の大都市を背景に、勝者の価値観の渦巻く社会に居場所を見出せず、周辺部に追いやられた人々を描いています。

1971 年生まれのサラ・ケインは、処女作『Blasted』で衝撃的なデビューを飾り、6 本の作品を書き上げた後、28 才の若さで自ら命を断ちましたが、彼女の作品群は高い評価を受け、今なお世界中で上演され続けています。

遺作となった『4.48 サイコシス』は、鬱病を発症し、闘病の末に自殺をはかった作家本人のドキュメンタリー的要素を持った作品として知られています。タイトルの「4.48」とは、明け方の 4 時 48 分という時間を示し、作家は、この時間になると決まって目が覚め、覚醒した意識でこの作品を執筆していたことに由来しているといえます。テキストには、ト書きや役名などは書かれず、いくつかのダイアログと詩のような断片の、合わせて 24 の章から構成されています。そこには統合失調症患者の内的心象風景が広がり、それはまるで「絶望」と「孤独」のシンフォニーのようです。

また、作品中の「私」と称する匿名の個人の内面に、この「私」という主体とはそもそも何であるのかと問いかげざるを得ないような、様々な場面が展開されており、単なる個人的伝記の枠を越えた広がりや深みを同時に持ち合わせる、稀有な作品となっています。

私たちは今回、ケインがテーマとする資本主義社会の都市の問題が、この日本という国にも共通していることから、単なるイギリス人作家による遠い国の話ではなく、私たちの現実にも切実な問題としてこの作品を取り上げられるのではないかと考えました。

劇作家本人の伝記的要素の強い作品であることから、そういった解釈のもとに世界中で多数の上演が行われてきましたが、私たちは今回の企画に際し、同時にこの作品の持つ、個人の枠に回収され得ない要素を重視し、誰か特定の個人のある一定の時期の物語としてではなく、社会的な広がりを持たせた上演の可能性を探りたいと考えました。

現代の日本社会において、この作品はどんな上演の可能性を持っているのでしょうか。

現在日本では、7年連続で自殺者の数は年間3万人を超え、その背後には鬱病が潜んでいると考えられています。この自殺者数は、旧ソビエトに属していた現在の体制移行国と並んで世界のトップクラスに位置し、「自殺は日本の文化」とまで言われています。こういった問題は長い間放置され続け、最近になってようやく対策が模索され始めてはきたものの、依然としてその病理の根深さを見せつけています。「働き盛りの鬱病」「中高年の鬱、自殺、孤独死」、また中・高校生のリストカット(彼らの行為の多くは自殺を目的としない、「心の叫び」の表れとしてのリストカットだといえます)など、こういった問題は幅広い世代に渡っています。

彼らは私たちの病んだ社会の犠牲者とも言えるのではないのでしょうか。そして今の社会が間違った方向に進んでいるという、警告でもあると思えます。

こういった社会を描くために、私たちは、10代の女性、30代の男女、60代の男性と、幅広い世代の5人の俳優とともにこの作品に取り組みます。

本作品の上演意図 「立ち止まって考える場」としての上演

私たちの上演で大切にしたいことは、「たった一つの答え」を観客に提示することではなく、「想像力による参加によって、いくつもの認識や答えを可能にする」ような上演であり、「立ち止まって考える場」としての上演、観劇によって、考えが進んだり、また謎が深まったりするような上演です。そのため、「わかりやすい一つの答え」を求められる方にとっては、少しわかりにくい上演になってしまうかもしれません。しかし、「想像力の欠如」が取りざたされて久しいこの国で、ますますそれを助長するような上演を、私たちはすべきではないと考えています。想像力の欠如した社会がどうなってしまうかは、毎日流れてくるテレビなどのニュースや、報道を見れば明らかです。

しかしこういった時代だからこそ、演劇がもう一度、力を発揮できる表現に成り得ると私たちは考えています。何をしようとして一方通行で流れてくるテレビなどとは違い、実際に同じ空間を共有し、生の時間を共有し、あるフィクションを共有する演劇は、双方向のコミュニケーションや想像力など、現代社会で最も欠如している要素から成っています。そういった演劇の持つ力を最大限に生かした上演を、私たちは目指しています。

ドラマツルクという職能の実態は、それが職業として成立しているドイツにおいてもさまざまなようです。ことばとしては、ドラマツルギーを担う者、ということでしょうが、公演やフェスティバルの企画に関わるプロデューサー的な役割を担う者もいれば、逆にかぎりなく劇作家に近い仕事をする人もいます。それぞれの出自と資質に応じていろいろなタイプがいます。

昨年来日したドイツ人ドラマツルクの印象的なことばを借りると、演出家の相談相手であり、しかも、何も背負わない相談相手だということです。プロデューサーや研究者は、興行の成否や学問的権威など、かならず何かを背負っており、純粹に作品の内容や質について、自由に、対等に、演出家の相談に乗ることが難しいのです。

アーティスト的な責任を共有する、このドラマツルクという相談役がうまく機能すると、演出家への過度の負担が減らせますし、また演出家の独りよがりな判断によって作品が小さくなることを避けることもできます。いまの日本で、演出家自身が望むと望まざるとにかかわらず当然のようにおこなわれている、演出家への権力・責任の一極集中とトップダウンの作業形態がゆるめられ、風が通ることになります。

阿部初美とわたしは、「4.48 サイコス」という戯曲のもつポテンシャルを、いまの日本でどのように引き出しうるか、さんざん検討を重ねてきました。そこでのわたしの重要な役割は、情報収集とともに、アイデアを一度徹底的に散らかすことであり、いわば「捨てるための」アイデアを数多く出すことです。答えを教えるのではなく、一緒に問いのかたちを探す作業であり、これは稽古が始まってからは、俳優やテクニカル・スタッフとも共同で継続されます。この共同作業の潤滑油のような役割がドラマツルクの仕事であって、共有されるプロセスの豊かさが、最終的な作品の質に結びつくと信じています。

スタッフ・キャスト

作: サラ・ケイン

演出: 阿部初美

ドラマツルク: 長島確

美術: 佐藤慎也

照明: 田島佐智子

音楽: 安野太郎

演出助手: 田中智佳

舞台監督: 寅川英司 × 突貫屋

制作: 大久保聖子 (NPO 法人アートネットワーク・ジャパン) / 住吉梨沙

出演: 谷川清美 (演劇集団円) / 笠木誠 / 水町レイコ (演劇集団円) /
久保彩美 (テアトルアカデミー) / 徳山富夫

サラ・ケイン Sarah Kane

1971 年イギリス生まれ。95 年、最初の戯曲『ブラステッド』がその残虐さで物議を醸す。以後『パイ
ドラの恋』(96)『浄化』(97)『皮膚』(短編映画、97)と書きつぐ一方、演出家・俳優としても活動。作
風を転じた『渴望』(98)をさらに押し進めつつ、およそ1年をかけて『4.48 サイコス』を書き上げ
た直後の99年2月、自殺。「演劇の地図を書きかえた」現在最も重要な作家である。

阿部 初美 Hatsumi Abe (演出家)

1970 年生まれ。演劇集団円 (演出部) 所属。劇作家・演出家の太田省吾に師事した後、演出活動
を始め、『抱擁ワルツ』(太田省吾作 / 仙台演劇祭出品、00 年) でデビュー。主な演出作品に、
『昼の月、短い夢』(川上弘美原作 / 藤沢市湘南台市民シアター、01 年)、世田谷パブリックシアタ
ー・ドラマリーディング 17『4 時 48 分サイコス』(サラ・ケイン作 / シアタートラム、02 年)、スリー・
ポイント「ベケットライブ」シリーズ vol.3~6『わたしじゃない』『ロッカバイ』『あしおと』『クァクァ』(サミ
ュエル・ベケット作 / 東京国際芸術祭出品、02 年~05 年)、『記憶』(日本の近現代詩 / 台湾国際
リーディングフェスティバル出品、2004 年)、世田谷パブリックシアター・ドラマリーディング 24『エル
ドラド』(マイエンブルク作 / シアタートラム、05 年) など。03 年ドイツ、ベルリンでの「若手演劇人の
国際フォーラム」に招聘を受ける。

長島 確 Kaku Nagashima (ドラマツルク)

1969 年生まれ。立教大学卒。翻訳家 / ドラマツルク。翻訳にベケット『いざ最悪の方へ』(書肆山
田)『あしおと』『ロッカバイ』(「るしおる」43 号)『わたしじゃない』(同 46 号)、ミンヤナ『アンヌ・マリ』
(上演台本: 共訳) など。また舞台字幕に『ハムレットの悲劇』(P・ブルック演出)『月の向こう側』(R・
ルパージュ演出) など。02-05 年『ベケット・ライブ』に阿部初美とともに参加。稽古に密着し上演台
本作成・構成に深くかかわる。雑誌『るしおる』に戯曲の翻訳に関するエッセイを連載。

公演概要 Information

公演日 2006年3月18日(土) - 21日(火・祝)

3月18日(土)	3月19日(日)	3月20日(月)	3月21日(火)
	14:00	14:00	14:00
19:30		19:30	

上演時間：未定/ 終演後ポスト・パフォーマンス・トークあり

会場 にしすがも創造舎特設劇場

料金 一般 3000 円 / 学生 2000 円 (当日要学生証提示)
豊島区民割引 2500 円 (TIF のみ発売)
(全席自由・日時指定・税込)

前売開始 2006年2月1日(水)

チケット取扱

チケットぴあ 0570-02-9999/9966 (Pコード 366-206) <http://t.pia.co.jp>
e+ (イープラス) <http://eee.eplus.co.jp> (パソコン&携帯)
東京国際芸術祭(TIF) 03-5961-5202 <http://tif.anj.or.jp>

お問い合わせ 東京国際芸術祭(TIF)
TEL. 03-5961-5202 tif@anj.or.jp <http://anj.or.jp>